

宮崎市文化財調査報告書 第91集

生^{いせ}目^め古^こ墳^{ふん}群^{ぐん}Ⅱ

— 生目3号墳発掘調査報告書 —



2012

宮崎市教育委員会

序

本書に報告する生目3号墳は、生目古墳群の誇る九州最大の前期前方後円墳です。

古墳時代のある時期において、九州最大の勢力を誇った豪族がこの地に存在したことを示すこの古墳は、生目古墳群のシンボリック的存在であり、平成10年度に史跡整備を開始した当初から、少しでもその実体を解明すべく、これまで約20ヶ所で発掘を行って参りました。残念ながら土器などの出土遺物には恵まれていませんが、各調査区では良好な状態で残る葺石、敷石が当時の姿を現しました。1,500年前、おびただしい数の石で全面を覆われた巨大な古墳の姿は、いかに壮麗であったかと楽しく想像するとともに、その作業がいかに大変なことであったかと思い、古墳づくりにかけた先人たちの思いの強さもまざまざと感じとれます。

3号墳は生目古墳群全体の整備計画の中で、古墳そのものは現状を維持し、整備工事は園路の敷設と解説板の設置に留めるという簡易な整備として位置付けており、平成21・22年度に工事を実施いたしました。発掘調査としては、まだまだ3号墳の歴史的評価を行うに十分なデータが得られたとは言い難く、今後、更なる調査が必要と思われますが、当初の計画における整備が終了したことを一つの区切りとして、これまでの調査成果を報告することといたしました。

50基以上の古墳がある生目古墳群の整備はまだまだ続きますが、今後も、発掘調査の結果をもとに、ひとつひとつ、それぞれの古墳に適した手法を検討し、順次、整備を進めて参りたいと思えます。

最後に、発掘調査、整備工事の実施にあたりご協力いただきました関係諸機関の皆様、御指導、御助言をいただきました諸先生方、そして発掘調査に従事していただきました作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成24年3月

宮崎市教育委員会
教育長 二見 俊一

例 言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い宮崎市教育委員会が平成10・11・19・21年度に実施した生目3号墳の発掘調査報告書である。
2. 平成10・11年度調査分に関しては、過去2冊の概要報告書を刊行しているが(宮崎市教委2000・2001)、本書の内容と齟齬がある場合、本書の記載を正式なものとする。

3. 生目古墳群史跡公園整備専門委員会

委員長 西谷 正 (伊都国博物館名誉館長)
委員 石野博信 (二上山博物館館長)
奥野正男 (宮崎公立大学教授:当時) 平成19年度まで
北川義男 (南九州大学教授:当時)
白石太一郎 (大阪府立近つ飛鳥博物館館長)
高瀬要一 (独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産長:当時)
北郷泰道 (宮崎県埋蔵文化財センター) 平成19年度より
柳沢一男 (宮崎大学教授)

整備指導 文化庁記念物課
宮崎県教育庁文化課 (現文化財課)

4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

発掘調査

(平成10年度)

調査総括	文化振興課長	野間重孝
	文化財係長	永井淳生
調査事務主 事	竹野隆司	
調査担当 技 師	鳥枝 誠	
	〃	時任直也
	〃	稲岡洋道
	〃	宇田川美和
嘱 託	椎由美子	
	〃	松永光雄
	〃	小川正子
	〃	久富なをみ

(平成11年度)

調査総括	文化振興課長	野間重孝
	文化財係長	永井淳生
調査事務主 事	竹野隆司	
調査担当 技 師	鳥枝 誠	
	〃	稲岡洋道
	〃	宇田川美和
嘱 託	河野賢太郎	
	〃	椎由美子
	〃	松永光雄
	〃	小川正子
	〃	久富なをみ

〈平成 19 年度〉

調査総括 文化振興課長 野田 清孝
文化財係長 山田 典嗣
調査事務 主 事 吉永 大介
調査担当 主任 技 師 稲岡 洋道
嘱 託 井上 誠二
" 島井 伸幸
" 稲元 久美子

〈平成 21 年度〉

調査総括 文化財課長 永井 淳生
埋蔵文化財係長 富永 英典
調査事務 主 査 松崎 留美
調査担当 主任 技 師 竹中 克繁
嘱 託 井上 誠二
" 島井 伸幸

報告書作成

〈平成 23 年度〉

調査総括 文化財課長 田村 泰彦
埋蔵文化財係長 富永 英典
調査事務 主任 主事 岩切 瞳
整理担当 主任 技 師 稲岡 洋道
" 竹中 克繁
嘱 託 前田 美恵子

- 掲載した図面の実測および現場写真の撮影は、鳥枝、時任、稲岡、宇田川、竹中、河野、門田、井上、島井が分担して行った。
- 掲載した図面の製図、図版作成および遺物写真撮影は竹中が行った。
- 本書の執筆は稲岡（第Ⅱ章 第1・2節、第Ⅲ章 第1節）、竹中（第Ⅰ章、第Ⅱ章 第3節、第Ⅲ章 第2節）が行い、編集は竹中が行った。
- 本書で使用する1号墳、3号墳、5号墳、7号墳、14号墳、22号墳、23号墳およびその周辺部の測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、それ以外の古墳およびその周辺部の測量図は宮崎市教育委員会が作成した。
- 出土遺物および掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章 史跡生目古墳群の概要	
第1節 位置と環境	1
第2節 生目古墳群の概要	1
第3節 生目古墳群史跡公園整備事業の概要	5
第Ⅱ章 生目3号墳の発掘調査成果	
第1節 3号墳の位置と発掘調査前の環境	6
第2節 遺構	
(1) 3号墳の覆土	6
(2) 古墳築造後の土地利用	8
(3) 墳丘の構築状況	8
(4) 墳丘規格	8
(5) 葺石と礎敷	13
(6) 周溝とその周辺	13
第3節 遺物	21
第Ⅲ章 総括	
第1節 生目3号墳の墳丘規格について	23
第2節 生目3号墳の時間的位置付けについて	24

挿図目次

第1図 宮崎平野南半部の主要古墳分布図	2
第2図 生目古墳群主要古墳分布図	3
第3図 生目3号墳測量図および調査区配置図	7
第4図 調査区セクション図①	9
第5図 調査区セクション図②	10
第6図 調査区セクション図③	11
第7図 調査区セクション図④	12
第8図 調査区平面図①	14
第9図 調査区平面図②	15
第10図 調査区平面図③	16
第11図 調査区平面図④	17・18
第12図 調査区平面図⑤	19
第13図 出土遺物実測図①	21

第14図	出土遺物実測図②	22
第15図	墳丘規格復元図	23
第16図	生目古墳群における首長墓の変遷	25

表 目 次

第1表	生目古墳群高塚古墳一覽	4
第2表	墳丘各段の高さと斜面角	8
第3表	墳丘基底部標高	13
第4表	調査区整理表	20
第5表	出土遺物観察表	21
第6表	3号墳墳丘復元法量	24

写 真 図 版 目 次

図版1	生目3号墳全体	26
図版2	後円部3段目葺石(3C)	26
図版3	後円部3段目斜面葺石(3C)	26
図版4	後円部3段目葺石(3D)	27
図版5	後円部1段目テラス礎敷、2段目斜面葺石(3D)	27
図版6	後円部墳丘裾部(3D)	27
図版7	後円部墳丘裾部(3E)	28
図版8	後円部墳丘裾部(3F)	28
図版9	後円部墳丘裾部(3G)	28
図版10	後円部墳丘裾部(3G)	29
図版11	くびれ部墳丘裾部(3L-1)	29
図版12	くびれ部墳丘裾部(3H-1・3H-2)	29
図版13	前方部墳丘裾部(3I)	30
図版14	周溝および周溝立ち上がり(3L-2)	30
図版15	周溝および周溝立ち上がり(3D)	30
図版16	周溝立ち上がり(3Q)	31
図版17	3P	31
図版18	3D-2	31
図版19	出土遺物	32

第 I 章 史跡生目古墳群の概要

第 1 節 位置と環境

生目古墳群は現在の宮崎市街地より北西に 6 km ほどの宮崎市大字跡江に所在する。日向灘（太平洋）に面して発達した宮崎平野の南半部のほぼ中央、大淀川下流の右岸に位置し、始良カルデラから噴出した入戸火砕流の堆積によって形成されたシラス台地上を中心に、51 基の古墳が分布する。

台地上には古墳のみならず、宮崎における縄文貝塚の代表的遺跡となっている跡江貝塚や、弥生時代の環濠集落石ノ迫第 2 遺跡、中世山城の跡江城跡などがある。古墳の発掘においても縄文土器や弥生土器、古代の遺物等が混ざり込むことがあり、台地上における連続とした人間活動の存在をうかがわせる。

生目古墳群周辺における同時代の遺跡としては、同台地の崖面に構築された横穴墓 9 基があり、貝製雲珠などが出土している。集落遺跡としては台地より東に 0.5 km の位置に大屋敷遺跡、同じく台地の南東 0.5 km に間越遺跡がある。ともに生目古墳群との視認性が高い場所に位置しているが、間越遺跡は古墳時代後期を中心としており、前・中期を中心とした生目古墳群とはやや時期がずれる。しかし、大屋敷遺跡では 5 世紀中葉～後葉に比定される土師器の出土した堅穴住居があり、台地上における古墳築造当時に営まれていた集落として注目される。なお、近隣における同時代の生産遺跡は未だ確認されていないが、台地周辺には古代～中世の水田跡が検出された沖ノ田遺跡、雀田遺跡がある。

生目古墳群周辺の古墳としては、大淀川を挟んだ対岸、直線距離 2 km の位置に前方後円墳 4 基、円墳 9 基からなる下北方古墳群があり、その下流には内行花文鏡が出土したと伝わる広島古墳群がある。また生目古墳群と同じ大淀川右岸では、直線距離 3 km の位置に前方後円墳 2 基をはじめとする大淀古墳群が所在し、さらに下流には径 40 m の大型円墳である福長院塚古墳がある。大淀川下流域における首長墓の系譜は、前期段階における生目古墳群から中期～後期前半の下北方古墳群、後期後半の福長院塚古墳へと移り変わると考えられている。

第 2 節 生目古墳群の概要

生目古墳群は前方後円墳 8 基、円墳 43 基の計 51 基からなり、南北 1.2 km の細長い台地上およびその周辺に、現在、前方後円墳 8 基、円墳 23 基が現存している。

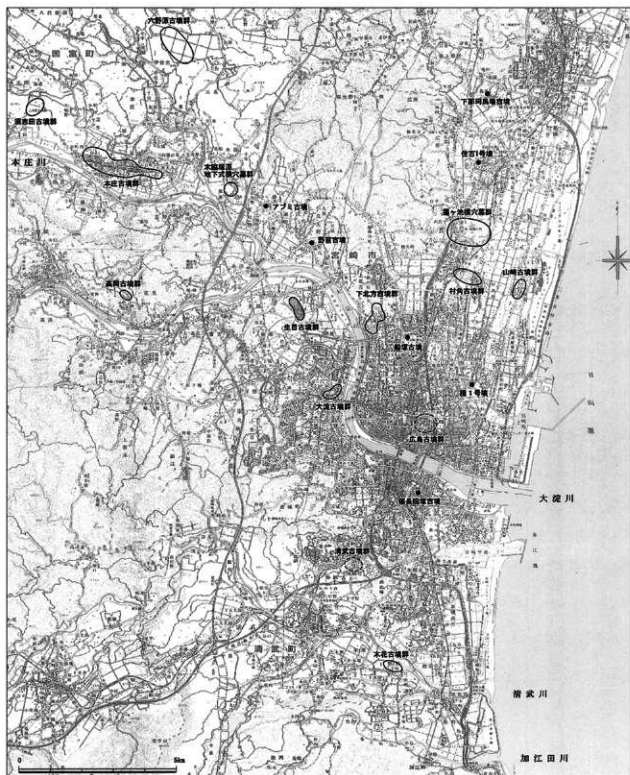
九州最大の前期古墳である 3 号墳をはじめ、3 基の 100 m 級大型前方後円墳が存在しているが、この 3 基は古墳時代前期において、1 号墳（現況 136 m）、3 号墳（現況 143 m）、22 号墳（現況 101 m）の順で継続的に造営されたと考えられている。九州では 100 m 級の大型墳が継続的に営まれた首長墓系譜は生目古墳群しかなく、吉備以西最大の前期首長墓系譜と評価されている。

前期段階に盛行する生目古墳群の首長墓系譜は、22 号墳以降、急激に規模を縮小し、57 m の 5 号墳以後、しばらくの間、前方後円墳の築造が停止する。その後、中期後葉につくられた 46 m の 7 号墳を最後に、生目古墳群における前方後円墳の築造は終了する。

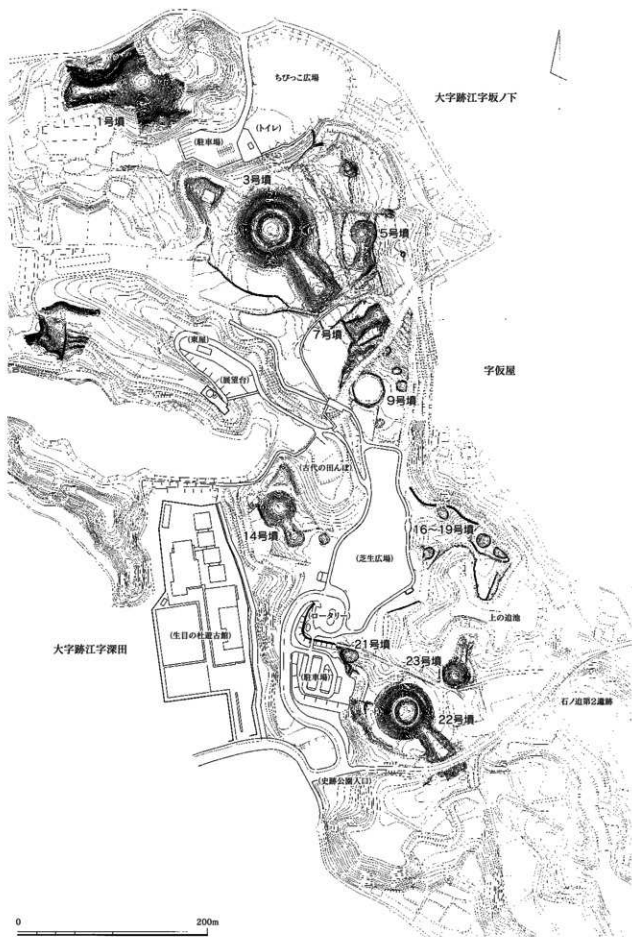
地域における首長墓系譜を検討すると、前節に触れた、大淀川を挟んで近接する下北方古墳群と生目古墳群では、互いの系譜における空白期を埋めるような形で交互に前方後円墳の築造が行われており、地域における首長権の移動を考える上で興味深い。

生目古墳群では、南九州に特化した墓制である地下式横穴墓も、現在までに 50 基近くが検出されており、その多くは古墳周溝内や周辺など、古墳に従属するような形で構築されている。地下式横穴墓

そのものの出現初期である5世紀前半代に位置付けられるものも多く、これまで南九州の内陸部中心に考えられてきた地下式横穴墓の発生や、古墳との関わり方を検討する上で重要である。また特筆すべきは、前方後円墳主体部の可能性がある地下式横穴墓のあることである。前述の7号墳では、後円部、前方部それぞれの墳丘下に玄室を持つ大型の地下式横穴墓が検出されており、特に後円部につく



第1図 宮崎平野南半部の主要古墳分布図 (Scale: 1/120,000)



第2図 生目古墳群主要古墳分布図 (Scale: 1/4,000)

第1表 生目古墳群高塚古墳一覧

現No	旧No	墳形	規模(m) 長×門径×高	規格	基石	出土遺物	備考
1	6	前円	136×86×17		有		
2	5	円	27				
3	17	前円	143×88×12.7	後円部3段, 前方部2段	有		後円部上段に中世?の薬研掘の溝が通る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	57×29×4.4	後円部前方部2段	有	円筒埴輪?, 壺形土器, 高杯	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段, 前方部2段, 造り出し有	有	土師器(甕, 壺, 高杯), 須恵器(杯, 高杯, ハソウ, 把手付鉢, 大甕, 脚台付壺, 筒型器台, 石製垂玉, 石製小玉, 石製紡錘車	後円部中心に向かって, 18号地下式を構築, その他周溝内から8基, 周溝外から4基の地下式横穴墓を確認
8	22	円		無段築	無		周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25	円	34				
10	24		11				古墳ではない
11	23	円	10				
12		円	12				昭和37年度確認
13	26	円	11				
14	27	前円	63×38×4	後円部, 前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より20号地下式横穴墓を確認
15		円	11		無		昭和37年度確認
16	30	円	16				
17	32	円	14				
18	29	円	17				
19	28	円	15				
21	35	前円		後円部2段	無	壺形埴輪	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段, 前方部2段か?	有	壺形埴輪, 土師器甕, 高杯, 壺	周溝内より 壺形出し部, 23号地下式横穴墓を確認
23		前円	57×30×4.9		有		
24	2	円	10				
25	3	円	11				
26	4	円	14				
27	13	円	19				
28	14	円	20		無		
29	15	円					
30	16	円					
31	未F	円			無		平成17年度確認(5号墳と7号墳の間)
32	未G	円			無		平成16年度確認(7号墳南側)
33	41	円			無		平成14年度確認(9号墳・新30号墳間)-横軸VIで旧15号墳と誤認-誤表記
34	42	円					
35	36	円					
36	1	円					
37	7	円					
38	8	円					
39	9	円					
40	10	円					
41	11	円					
42	12	円					
43	37	円					
44	38	円					
45	39	円					
46	40	円					
47	未A	円	10.5		無		11号地下式を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		12・13号地下式を埋葬主体
49	未C	円	17		無		
50	未D	円	10.5		無		14号地下式を埋葬主体
51	41	円					
52	42	円					
53	43	円					

られた18号地下式横穴墓は、玄室部分の調査はまだ行われていないが、後円部墳丘表面に、玄室規模を反映していると考えられる長軸6mの陥没孔が観察され、堅坑を含めた全長10m以上の大型地下式横穴墓であると推測される。

第3節 生目古墳群史跡公園整備事業の概要

生目古墳群は昭和18年9月8日に国指定史跡となった。指定を受けたのは前方後円墳7基、円墳36基の計43基で、指定面積は53,456.83㎡である。

昭和36～38年、古墳群の立地する台地上で「上ノ迫土地改良事業」が行われ、一部の古墳が開発削平によって大きく形状を変化させられるとともに、数基が消滅するという事態が起こった。当時の生目村役場はそれ以上の棄損を防ぐため、昭和37年度に国庫補助事業として、古墳群説明板の設置を行うとともに、古墳墳丘上の標石、古墳周囲の境界石の設置等を行った。またこの時に古墳番号の再整理が行われ、昭和18年の指定時とは異なる号数が各古墳に付されたが、その後、生目古墳群ではこの号数が一般的に用いられるようになり、現在でもこの号数を古墳呼称の基本として用いている。

生目村はその後の合併によって宮崎市に編入され、昭和51年度、市教育委員会では保存管理計画を作成した。ただし、この時には諸般の事情により史跡整備事業が開始するまでには至らなかった。

やや間を置き、平成5年度に宮崎市制70周年記念事業として生目古墳群の史跡公園整備事業が取り上げられ、市教育委員会では同年から平成7年度まで、台地上全体を対象とし、古墳周辺部の未指定地番におけるトレンチ調査を主とした範囲確認のための調査を国庫補助事業として行った。平成8年には生目古墳群史跡公園整備委員会が発足し、平成10年に『生目古墳群整備基本構想・基本計画報告書』が作成され、平成10年度に、市教育委員会では史跡整備のための確認調査を開始した。平成16年度には『国史跡生目古墳群整備実施計画報告書』を作成し、平成18年2月6日には、それまで墳丘単位であった史跡指定地を、その周辺も含めて追加指定を行い、指定地面積は総計142,982.10㎡となった。

平成20年4月に「国指定史跡生目古墳群史跡公園」として開園し、翌21年4月には古墳群の麓にガイダンス施設を兼ねた埋蔵文化財センター「生目の杜遊古館」が開館した。発掘調査および古墳単位での整備工事は、現在も順次実施中である。

第 II 章 生目 3号墳の発掘調査成果

第 1 節 3号墳の位置と発掘調査前の環境

生目 3号墳は台地北側の縁辺部に位置し、後円部背面側は崖面に迫る。3号墳の東側には前方後円墳の5号墳(墳長 57m)が近接して設けられ、3号墳と5号墳間には幅 8m程の周堤が見られる。墳丘は保存状態が良く、後円部の一部では段築も確認することができる。墳丘主軸は南北軸から、西に 40°傾く。宮崎大学による墳丘測量調査では、墳長 143m、後円部径 88m、後円部高 12.7m、前方部幅 42m、前方部高 6.5m、くびれ部幅 36m、後円部と前方部の比高差が 6.5mの数値が推定されている。後円部上には円形壇が見られ、基底部の直径 35m、高さ 1.6mを測り、周囲には幅約 4.0mのテラスが囲む。周溝は鍵穴形を呈するが、前方部前面側ははっきりしない。周堤は東側のみで認められるが、北側では丘陵崖面に接し、南側は前方部隅角付近で曖昧になる。発掘調査前の3号墳は西側の周溝がモモ畑として利用され、前方部上は植林スギが見られた。それ以外の大部分はアラカシやコジイ、マテバシイなどが繁茂し、幹直径が 1m以上に発達する樹木も見られるなど、古墳群内でもっとも照葉樹が発達する場所である。

第 2 節 遺構

(1) 3号墳の覆土

3号墳の調査は、他の古墳群内の古墳同様、史跡整備を目的とした発掘調査であったため、古墳構築時の面まで留めることを前提とする調査であった。

生目古墳群が所在する跡江台地の基本的な土層の堆積は以下のとおりである。なお跡江台地の土層堆積の詳細については『生目古墳群 I』(宮崎市教委 2010)を参照されたい。

I層 表土

II層 黒褐色土 0~50 cm 桜島第3テフラ(文明ボラ 1471年)、新燃享保軽石(1717年)を含む

III層 黒ボク土 0~30 cm Th-S (高原スコリア 11~13世紀)が認められる

IV層 黒ボク土 0~30 cm 自然堆積層 V層と基本的には同様

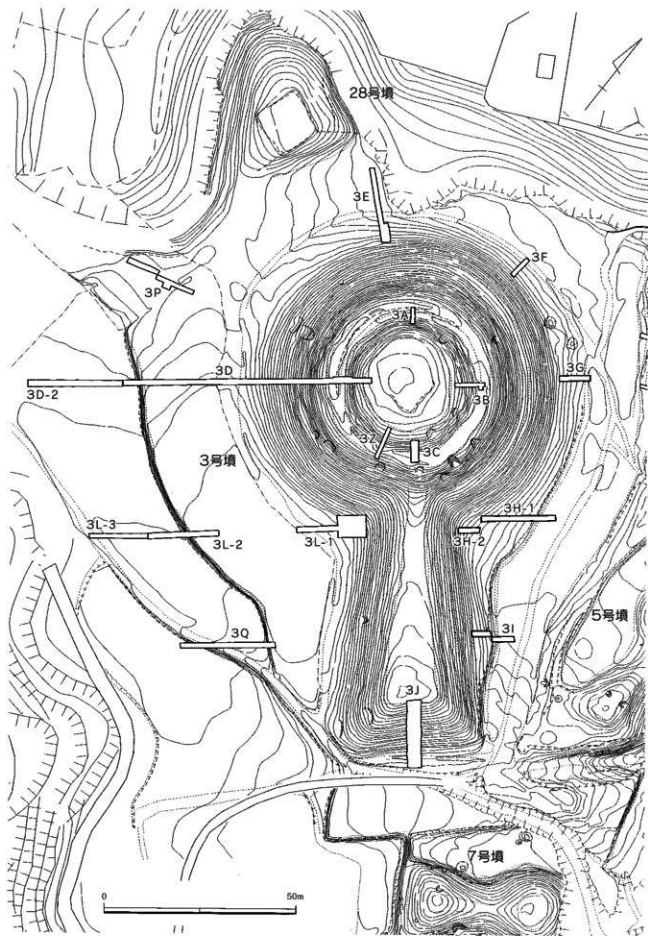
V層 黒ボク土 0~50 cm 自然堆積層 IV層と基本的には同様

VI層 アカホヤ土 0~30 cm テフラ層(K-Ah 6,500年前)

VII層 暗褐色土 80 cm前後 ローム層、下位で霧島小林軽石(14,000~16,000年前)が認められる。

VIII層 シラス 500 cm以上 テフラ層(25,000~30,000年前)

基本的にIV層とV層は同様の黒ボク土の堆積層であるが、V層堆積時に古墳が築造され、築造以後も同質のIV層が堆積する。そのため、性質上は同じであるが、丘陵における古墳築造期を境として、二層に別けている。古墳築造後は理論的にはIV層に被覆され、以後、III層、II層、I層の順で堆積することになるが、周溝と墳丘では様相が違う。周溝には古墳築造後、安定したIV層→I層の堆積が認められる。しかし、墳丘上では、周溝のような安定した堆積は殆どなく、墳丘を直接覆うべきIV層の黒ボク土が殆ど認められない。これは墳丘全体の表面が葦石と礫敷に覆われていたことで、イネ科植物の腐植土層である黒ボク土が育成されにくい環境だったことが影響していると考えられる。表面から遺構面までの堆積が10cmにも満たない箇所もあり、遺構面に直接、III層が薄く覆うことが多い状況であった。



第3図 生目3号墳測量図および調査区配置図 (Scale: 1/1,000)

(2) 古墳築造後の土地利用（後円部上の円形壇について）

先述したように、3号墳の後円部上には円形壇があり、周囲には幅約4.0mのテラスが囲む。この状況は22号墳（墳長101m）でも認められ、群内の前方後円墳規格の特徴とも考えられた。それを確認するため、円形壇周囲のテラスに合計5箇所の調査区を設定している（3A～3D、3Z）。調査の結果、4箇所の調査区で幅3.5～4.5m、深さ230～310cm、底面の幅が10～20cm程の栗研堀が確認された。溝は、各調査区において、墳丘斜面（葺石面）を開削して構築しており、溝の堆積土には、所々で11～13世紀以降の降灰した高原スコリアが外部から流れ込み、少量の糸切底の土師器の碎片が出土した。また、残り1箇所の3Zでは溝を設けず、土橋状に残していることも確認された。墳丘斜面の状況を一連で確認した3Dでは、この溝の外側で黒ボク土、アカホヤ土、ローム土、シラスの混合土が厚さ100cm以上堆積する状況が見られた。この堆積は溝を設けた際の廃土が配されたものと考えられ、栗研堀の機能を強固にするための堤状の施設だったと考えられる。生目古墳群のある跡江丘陵の南端には、南北朝時代の跡江城跡があり今回確認された栗研堀と内側の土壇は、その時期に相当する施設と考えられ、測量図に見られる後円部上の特異な形態は古墳とは直接関係のないものと判断された。

(3) 墳丘の構築状況

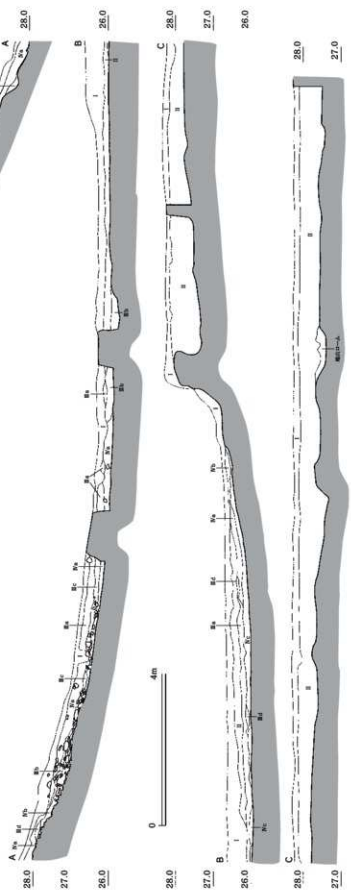
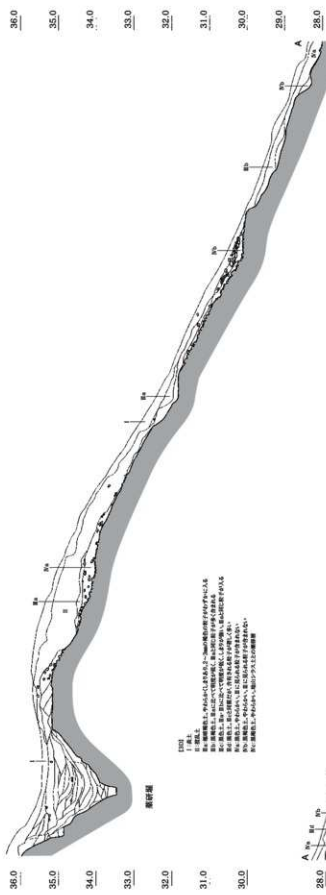
墳丘は、先述したとおり、基本層序V層上面で構築しており、検出された標高を捉えることで、築造前の土地の状態を推定することができる。3号墳西側の周溝外縁上に設けた調査区ではVI層が露頭し、本来遺存するべきV層は削平されていたが、復元すると標高28.3m程度と考えられる。後円部主軸に直交する西側の調査区3Dでは墳丘1段目テラスのやや下った標高30.0mの位置で、地山整形（V層上面）と盛土構築の境界が確認された。また3号墳後円部から東進した位置に立地する4号墳では、標高23.8mでV層上面が検出されており、これらの数値を比較すると墳丘部分が最も高くなる。そのため3号墳の後円部は、築造以前から低い丘状の隆起があった場所に、墳丘を設けたと推測される。もうひとつ注目されるのが、後円部の墳丘1段目がほぼ地山削り出しにより整形されていることにある。墳丘1段目の高さは3.1mを測り、さらに周溝底面はⅧ層シラス層に到達し、最深部までの深さは1.7mを測り、最大で3.6mの地山を削り込んで墳丘の1段目と周溝部を設けており、3号墳の築造がいかに大土木工事であったかの一端が伺える。墳丘2段目以上は盛土構築によって整形されている。盛土の状況は先述した栗研堀の壁肌で確認できる。盛土材には墳丘1段目の削り出しと周溝掘削の際の廃土を利用したことを思わせるV層以下の黒ボク土、アカホヤ火山灰土、ローム土、シラス土を利用している。これらの盛土材は10～30cm程度の厚みで横筋に積み重ねており、極めて締り、敲き締めながら盛土を構築していったことが伺える。

(4) 墳丘規格

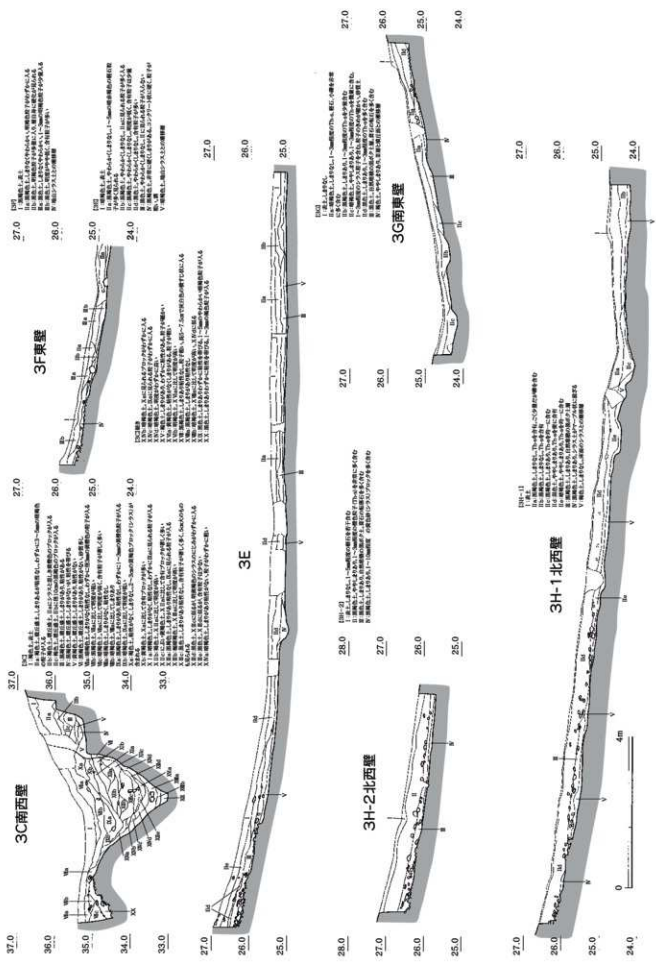
墳丘の段築は、後円部が3D、前方部が3Jそれぞれの調査区で確認し、後円部が3段築成、前方部が2段築成であることが解った。調査結果から復元した各段の規格は以下のとおりとなる。後円部は1段目の高さが3.1m、2段目が4.0m、3段目が4.2mを測り、上段に向かうに従い高くなる。前方部は1段目の高さが3.7m、2段目が2.8mを測り、後円部とは逆に下段が高くなる。これら復元値と復元標高を記すと第2表のとおりとなる。

第2表 墳丘各段の高さと斜面角（ ）は復元高

部位	斜面	高さ	平坦面 テラス 標高
後円部西側 (3D)	3段目	26°	4.2m (38.3)
	2段目	28°	4.0m 34.1
	1段目	24°	3.1m 30.1
前方部前面 (3J)	2段目	26°	2.8m (31.9)
	1段目	29°	3.7m 29.8



第4図 調査区セクション図①(3D南東壁) (Scale: 1/100)



第5図 調査区セクション図② (Scale: 1/100)